「モロタイ」に召喚せらる。
十二月三十日、旅団長濠州軍命令により「モロタイ」に召喚せらる。
十二月三十日、旅団長不在間代理
陸軍大佐　田村多郎
昭和二十一年四月二十三日、末益少佐は司令部人員四名を指揮し「メナド」港に先遣を命ぜられ「ビートン」集結地出発。
四月二十三日、旅団は復員のため「メナド」港に向かい前進を開始す。
五月十日、復員船「メナド」港出航。
五月二十日、和歌山県田辺港に入港。

ハルマヘラ第三十二師団
兵隊蟻の遙かな道

茨城県　篠田市郎

私は近衛歩兵第一連隊歩兵砲中隊に入隊し、連隊砲（四一式山砲）の教育を受けました。昭和十七年は大学、高専校の理工学部を除く学生の徴兵延期が廃止されたため、空前の入隊ラッシュとなりました。十月、前橋予備士官学校を卒業し原隊に帰り、第三機関銃中隊の将校室が居室となりましたが、これは入校と同時に機関銃教育と変わったためであります。
私の最初の転属命令は十二月早々で、南方軍速射砲小隊長としての内命を受けましたが、私を含めて四名が速射砲の未教育者でした。出発までの短い期間でも、猛特訓を受け終了した夜、腹痛となり翌日入院、手術を受けましたが、盲腸炎の手遅れで腹膜炎も併発し、一命は取り止めたものの、胸部疾患の熱も出て転

属は取り消され、三月自己退院し、翌月支那の歩兵第二一一連隊に転属しました。この自己退院とは病気が治らないのに、願い出て退院することで、これも仲間たちに遅れをとったという自責の念と、「撃ちてしやまん」の赤誠が、小学生にまで及んだ時代背景の中で、純情な青年のとるべき最善の道と考えたためであります。

私が復帰すると、仲間たちから「貴様は運の良い奴だ。あの連中はバシー海峡でボカ沈を食らって全員戦死」したとの噂を聞きました。私と一緒に特訓を受けた旧姓新井茂雄君は日大水泳部出身で、当時百メートル、二百メートル自由型の日本記録保持者であり、現衆議院議員中山利生先生や、終戦直後フジヤマの飛魚として大活躍された古橋広之進氏の大先輩で、入隊直前、佐藤宣子さんと結婚し帰らぬ人となりました。「悲しき哉、人生」であります。なお現在、奥様は御健在です。

私が着任した楓第三十二師団は、北支方面軍に属し山東省全域（これは北海道の二倍の面積）の治安警備が任務でした。在支一年の間に二つの作戦（十八夏大行作戦・勇号作戦）のほか無数の討伐にも参加しました。

師団司令部所在地は津浦線沿いの兗州で、三里南の山東省曲阜は孔子生誕の地で中国の聖地として知られ、現在も文教の街として人口も六十万の都市に発展したことに一驚しました。

私が勤務した歩兵第二一一連隊第一機関銃中隊は孟子生誕の地、鄒県で、やはり文教の街で、城壁に囲まれ、当時のままでした。「孟母三遷の教え」は有名な格言ですが、これは孟子のお母さんは豊かな生活ではなかったが、子供たちの教育のために住まいを三回も移したという猛烈な教育ママで、その住まいが当時も南門近くにありました。孟子は孔子の次の聖人ということで、亜聖と呼ばれ、代々の子孫の方々が亜聖殿を守り、第七十四代の孟繁驥氏が世襲の屋敷で管理されておりました。私は見学のとき、孟大人と撮った写真を現在も持っております。

鎮警備隊長として初めて中隊を離れた時のことです。

前任者は経験豊かな曹長でしたが、ホヤホヤの将校であっても立場上負けられない対抗意識もあり、今までと違った宣撫工作によって、治安維持の効果をあげようと考え、丸二日の行程で出発しました。

汽車で済寧に一泊、この地はクリークによる農作物の大集産地で活気溢れる都市であり、野砲第三十二連隊や軍の野戦倉庫がありました。これらと必要な連絡を行い、翌早、朝船を雇いクリークを進み、琵琶湖の数倍もある微山湖を渡った寧陽鎮（日本の村の意）が目的地でした。

中隊の警備地がこれ程遠いと驚く反面、万一襲撃されたならば全滅することを観念しました。

翌日、日本軍に協力している県警に出向き協力の依頼をしました。これは面子を重んずる中国人にとって最も大切なことで、今までは全く無視していたとあって好感を得ました。

次に警備担当地区内の七人の鎮長を集め、「明日から毎日午前中、警備隊において無料の診療を行う」旨を伝えました。これは半島出身の通訳を通じ確実に伝えたのです。このだれも考えない発想も、途中家々の前に佇む農民たちの敵意に満ちた表情と、目は爛れ、皮膚は瘡蓋だらけの姿を見て「医療宣撫」というだれも考えない方法が思い浮かび、これだと考えたのです。

戦争は武力をもって相手を捩伏せるのが軍の役目であり、この事がどんなに住民本意の発想であっても、後でその代償として無理な要求をされるかを勘ぐって、二～三日は全く反応がありませんでした。しかし新しい隊長の要求に応じなければ、また、どんな要求がされるか分からず、しばらく申し訳程度の小人数が治療に来ました。

中国の医療は現在もなお、漢方が主流で、眼病や皮膚病は治療もせず、衣服は垢で黒光りがしており、入浴の習慣も一部上流社会以外になく、また、農家には便所がありませんでした。これは一戸ごとが土塀に囲まれ、開いているのは正面の入り口だけで、鶏と豚は庭に放し飼いされており、人が片隅で用を足すと豚が直ぐ片付けてくれます。我々は常々これを見ているので、豚肉は食べる気がしませんでした。

住民への治療も二～三日すると全治しました。これは西洋医学が初めてのため、恐る恐る来た患者たちが魔法のように治ったのですが、このことが住民たちの間に口コミで伝わるのに余り日時を必要としませんでした。

そして警備隊前は住民で溢れるようになりました。こうなると薬物が不足し、古年兵二名を済寧に出張させましたが、兵士たちも私の行動をここまでは読んでいませんでした。何せ警備隊勤務となると、何カ月もの間、三十メートル四方の望楼陣地から一歩も外にでない生活でしたので、「軍隊はメンコの数だ」とうそぶき、点呼もとらない単調な生活から「公用腕章」をつけて済寧に出張し、賑やかな中国街の見物ができるので喜びました。

そして兵士たちの態度がガラリと変わりました。大勢の患者の中には全治した喜びで、コッソリお礼の品を衛生兵に届ける者もありましたが、その場で返したことが鎮長たちに伝わり、今度は鎮長たちが「我々の気持ちだけは受け取って欲しい」いうことでした。これも断ると今後の協力関係もあるし、鎮長たちにはそれぞれ面子もあることでもあるので承知すると、以後は、炊事用に時々交代で材料を届けてくるようになり、この時ほど豪勢な食事にありつけたことはありませんでした。

このころ、一つの問題が起きていた事に気づいたのです。それは夜になると必ず近くの闇の中や遠くで聞こえた銃声がパッタリ止んだことです。経験の多い古年兵に尋ねても分からず、あるいは嵐の前の静けさと考え、警戒を更に厳重にするとともに、明日から毎日一時間警備隊広場で訓練を行うと伝えました。これは治療者の中に混じって、日本警備隊の動きを監視しているであろう見えざるスパイに対する示威運動であるため、より厳格な態度で行うとの手の内も話すと、喜んで応じてくれ、成果を挙げることができました。一糸乱れぬ統率なら盤石です。

二回目の薬物受領も行いましたが、次はだれの番か、で兵士たちは明るいムードとなり、心底から私を信頼してくれました。その後間もなく補充兵入隊のため、

教官として帰隊命令を受けました。別れの朝、早朝から爆竹の連続に驚きました。警備隊前に集まった大勢の村民たちと共に、鎮長たちの口から「今度の隊長は住民たちの恩人で、毎日無料の医療を行っているので攻撃しないで欲しい」旨を、魚台にある自国軍司令部に嘆願したため、隙あらば攻撃しようとしていた中国軍の行動も中止されていたことも判明し、銃声の止んだ日々の不気味な謎も分かりました。

私の思いつきの住民宣撫の施療が、これ程までに信頼され、地域を守るべき警備隊が反対に住民に守られていたことを知りました。そして戦火無き日中友好に役立ち、到着の時とは違って鎮長たちの準備した船で済寧まで送られましたが、私はこのとき、「平和の原点」を垣間見たように感じました。

土屋大隊副官として、十一月襄陵る山東の山野で一カ月に及ぶ勇号作戦に参加し、「大隊の危急を救った功は抜群なり」として賞詞を受け、「褒賞休暇内地帰休一カ月」と、紫山信一中隊長から軍刀一振りを頂戴しました。

敗退と玉砕を続ける南方戦場への「助っ人」として（楓第三十二師団・石井嘉穂中将）、北支を後にしたのは昭和十九年二月でした。真冬の大陸で夏服に着替え、隊の炊事用具を一切持たない出発のため、だれもが敵前上陸を覚悟しての呉淞港から乗船で、「生きて帰ることのできない死出の航海」であることを観念しました。

これは七千トン級の「ブラジル丸」の最下層の船倉に馬を、その上から兵器弾薬等を幅七〇センチほどの通路を残して積み上げ、舷側の奥行き約四メートルを上下二段に仕切って、三千五百名を押し込んだのです。この航海が火葬場ならぬ水葬場行きの出港でした。

行き先を敵にさとられないためとして、行きつ戻りつしての航海は、大本営の前時代的感覚か小学生以下の幼稚な発想。この最初の犠牲者は、季節風の吹き荒れる暗夜の台湾海峡で用便中の兵の転落死でした。これは甲板から板を突き出しそれに跨がり、青竹に掴まってするのですから決死の覚悟であり、しかも囲いの無い順番待ちの行列の見守る中での用便です。将校とて

同様で、三千五百名に五つの便所とは、どんな計算からだったのでしょう。

揺れる船の踏み板上で手を離したら、それで一巻の終わりでした。南に進むにつれて気温が上がり、馬がバタバタと死に、水葬されました。私も時々中隊の馬のところに下りて行きましたが換気が悪く、アンモニアガスの中では五分といられない有様でした。

こうして二十五日の航海でしたが、暑さで船体は手をふれると火傷をするほどで、食事のときの一杯の水も汗となり、虱が湧き、褌一つで毎日虱取りが日課となり、取っても取っても潰しきれず、縫い目の多い千人針の腹巻には閉口しました。

この航海中（竹一船団）、バシー海峡で「第一吉田丸」轟沈、乗船の第二一〇連隊小池連隊長以下二、六五三名海没。セレベス海で「亜丁丸」轟沈、「天津山丸」「但島丸」は輸送船と一瞬に撃沈され、ハルマヘラ島に入港できたのはわずかに四隻に過ぎず、我々は天運に恵まれたことになります。

歩兵第二一一連隊は湾口のモロタイ島に配備され、陣地構築半ばにして再び新配備のため、ハルマヘラ島に戻りました。このモロタイ島は、昭和四十九年十二月三十日、台湾高砂族の中村輝夫さんが奇跡的に救出された島として新聞紙上に紹介されました。

帰島二日後、私は部下と共に野砲第三十二連隊配属機関銃隊として本隊を離れましたが、これが本隊との永遠の別れとなりました。上陸当初、連隊は、第二大隊を木場大佐の主力部隊として、サンギール島タラウド島守備として引き抜かれたため二個大隊となりました。

九月十五日、モロタイ島に米濠軍四万数千名が上陸したため、大本営命令による逆上陸、斬り込みを命じられたのであります。

戦後の調査によりますと、守田連隊長以下本部全滅。新連隊長を発令された大内競大佐も上陸できたものの重傷を受け行方不明。第一大隊長服部少佐以下本部全滅。第一機関銃隊上島隊長戦死、指揮班も数名を残し戦死。太田小隊全滅。参加の各中隊も数名が救出されたほか、ほぼ全滅となり、戦局に影響を与えることも

できず、守田連隊長の御遺骨のほかは今なお、モロタイ島のジャングルを墳墓としております。

我が小隊が出発したこの日は、師団にとっての大厄日で、我が隊が海上航行中、米軍の戦爆連合百三十余機が狭い海岸線に初爆撃を敢行し、司令部側海岸に積まれていた師団将兵五万名の総ての物資が一瞬にして火の海となり、吉田参謀長、山本参謀も戦死されました。

我々の乗艇も二機のP38から銃撃を受け、何とか危機を脱したものの、この日を境として一粒の食料も追送されず、復員船が入港した昭和二十一年六月一日まで、丸二年間、椰子の実と野生の木の根や草を煮て食べ、地上の動く小動物は総て口にしました。言葉で語れぬ生きるための苦労をいたしました。

珊瑚礁の隆起した小島は、海岸線五〇メートルくらいまで椰子林があるだけで、表土が五～六センチのため自活作業は成功せず、背嚢にくくりつけた小十字鍬だけでは、身を隠す穴も掘れず、撃たれて当たれば死ぬだけでした。終戦直前は全く食うものがなくなり、相談の上、生活場所より遠いところの椰子を倒し、その梢の実を食べることにしました。

ブバレー島の生活は全員が褌一枚です。これは衣服を一着ずつ持っていましたが、「十年戦争」を予告されているため、これを着てしまったら、いよいよ最後の時に着る衣類がなくなると考えてのことでした。飲み水の代わりは椰子の実の水でした。赤道直下は一年を通してほとんどスコールがなく、我々の生活は現在テレビで見る太古の原人生活そのもので、言葉では表現できません。

日中は少しでも煙をみると徹底した銃撃を受け、夜になると時々魚雷艇が海岸三〇メートルくらいのところに来て監視しているのですから、緊張しました。射撃してきたら攻撃以外にありません。そして即戦死です。

同じ戦場でも海軍衛所隊の生活は、設営隊の作った床板張りの兵舎に住み、白米にサツマ芋やタピオカを混ぜた飯を食べての生活で、これを見ると、つくづく陸軍部隊の哀れさを感じました。

しかし私は、海軍予備学生出身者と知己があったことと、重機関銃の操作を指導したことから海軍の一銃分の指揮を要請されたこともあって、この海軍衛所隊に顔が効いたことが幸いしました。その結果、麻雀牌を借り受けたり、安全剃刀の刃を使って彫り、日曜を休日と定めて娯楽に役立てたり、厚板をもらってサンダルを作らせ、作業の時以外はこのサンダルを履き、士気の温存をはかりました。また鶏の雛一羽を譲り受け、これが一年で二十数羽になったことには驚きました。飼料は椰子の木にさがった蟻の巣を与えるだけの簡単な作業でしたので、これによって生きる希望を与えられました。この成果こそ無から有を産む第一歩でありました。そして見捨てられたような生活の中でも生きる希望が湧いてきました。嬉しかったです。

終戦は海軍のラジオにより聞きましたが、正式には九月に入ってからで、その対応策は私なりに考えておりました。北拠点の野砲、小銃、機関銃の三隊に対して、私が師団からの終戦命令を伝えました。

このとき、私は「ただ今から軍歌に代え流行歌演習を実施する。日直下士官は音頭を取れ」と命じたところ、終戦命令で気が狂ったかと考えてか、だれもが目を白黒させているので、

「篠田中尉は気が狂っておらん。敗戦による自暴自棄から脱し、いつの日か必ず故国に帰国できる希望を持つこと。このためには故郷の妻や子供たち、家族を思い浮かべ、石に噛りついても今の苦労を乗り越えて帰ることを常に考えなければならない。戦争に負けた軍歌を歌って士気が上がるか。故郷を思い浮かべる流行歌こそ士気を鼓舞する手段方法である」

と、祖国復興の尖兵としての心構えを話したところ、兵士たちの目は輝き、苦境の中から立ち上がる決意の歌声は椰子林に響き、感動的でした。

程なく私の越権?による指導が野砲連隊本部に通報され、私は海を渡ってダル山中に行きました。三田村佐一大佐直々の詰問です。「貴官のその頭は何だ」に始まりましたが、散髪用具も無く山賊頭のボウボウでした。私は、部下たちにも「髪を伸ばしてもよろしい。髪を伸ばすことは帰国後、祖国復興のために働く平和

の戦士への第一条件である」と、もっともらしい言葉をつけて認めていたこと、今後幹部として取るべき道は、一名の事故もなく復員させることを考え、過激な行動のデマに対する対応策であること、などを申し上げ、叱られる覚悟の出張も事無きを得ました。

間もなく連隊へ復帰し、米軍に武器引き渡しの後、また抑留地への移動です。私は先遣隊長としてジャングル踏破の後、カウに到着し、海軍側と交渉し、連隊の将兵を、南方戦場で初めての海軍兵舎に収容することができました。これも予備学生出身の木島大尉（副官）や宮内中尉の格別の努力によるもので、後、復員までの間、三吉悌一連隊長から重宝がられました。

在島五万の陸軍の中には終戦と同時に、「威張っていた将校、下士官は殺す」という不穏なデマも流れており、師団のお偉方も「昨日の部下は今日の敵」となったことに対する指導対策に頭を痛めていたようです。

間もなく師団から「日曜日を休日とすること。各中隊演芸班を作ること。頭髪を伸ばすことを認める」ことが達せられて、わずかに明るさを取り戻すことができました。これも私が三田村連隊長に申し上げたことそのままでした。

カウの生活は九カ月に及びましたが、私は「神様、海軍様、篠田中尉様」と他中隊からも慕われ、私を見ると停止敬礼をする者もありました。軍隊での停止敬礼は直属上官に限られており、兵士たちは私を恩人と考えての動作でありました。食事は毎食二個の乾パン、雑炊だけでした。こうして軍紀を取り戻すことができました。

昭和二十一年五月三十一日、帰国のため乗船地ペテアンに移動しましたが、ここで軍隊最後の露営の夢を暗黒の椰子林内で過ごしていたところ、「師団の残留勤務隊長を命ず」が達せられ、しかも「司令部復員のため、申告に及ばず」には、やり場のない怒りを感じました。さらに残留人員不明です。これもまた背広服仕立ての経験者と靴作りの経験者を残し、「以後は連合軍の指揮を受くべし」の非情な命令でした（オランダ軍隊長レーメイ少尉）。

翌朝、連合軍兵舎に出向くと、オランダ軍とインド

ネシア軍の管理で、日本軍の残置物資倉庫を一任されました。倉庫に入ると、一つの倉庫には背広服地や衣類、ミシンなどが積まれており、他の倉庫には夢にまで見た食料が保管されていました。私は残留勤務という不運も忘れ興奮しました。何せ昭和十九年七月二十七日以来、昭和二十一年六月二日の今日まで、一粒の米も食わず、「せめて死ぬまでに一回でも白い飯を腹いっぱい食べてみたい」との願いが、今現実のものとなったのです。

私は昭和十八年以来、苦楽を共にしてきた戦友と別れ、島満軍曹、伝令の斎藤正男上等兵の他は総て名前も知らない残留者を整列させて、「食事は個人炊さんとする。食べ過ぎに注意し、徐々に体力を回復するよう注意すること…」の型破りな訓示をしたところ、以前からの部下たちの場合と同様に信頼を得ました（食物への魅力は絶大でありました）。

そして早速仮兵舎を作らせました。これには兵士たちは移動の度に木を伐り蔓を使って家を作る作業には経験があり、容易でした。私は倉庫の見渡せる場所の見張り所に、空き箱をならべ、その上に天幕を敷きゴロ寝を続けましたが、島軍曹が再三「隊長殿の居場所がないので作らせましょう」と申し出てくれました。しかし私は「俺には俺の考えがあり、オランダ軍に対する対策を考えてのことだ」として最後まで貫きましたが、私は常に「部下ありての指揮官である」ことに徹しました。

ドラム缶風呂で二年五カ月ぶりに戦塵も流しました。

作業は、オランダ軍の帰国土産である兵士たちの背広服と短靴作りで、復員した海軍の残置物資である大量の背広生地と皮革を使っての作業でありました。今までと違って十分な給与と室内作業のために、健康を取り戻すことができたのは望外の喜びでありました。

八月下旬、突然明日入港の船で帰国が達せられ、兵士たちは夜を徹して背広服と皮靴を仕上げ、オランダ兵たちを感激させ、日本軍の真価を見せつけました。

当日、本船まで送られ桟橋を離れるとき、手を振り別れを惜しむオランダ兵士たち、その姿は国境を越え、敵視した憎しみを忘れた友情だけでした。お礼として

許可された十数梱の船内での補充食、持てるものは何でも持ってよいとの言葉に兵士たちも、新しい服装に着替え、乗船検査免除で乗ることもできました。

私は残留命令を申告したとき、連隊長に「誓って任務を完遂いたしますので、何卒御安心ください」と復命した任務を、完全に果たし得たと確信いたし、復員後、兵庫県のお宅に報告いたしました。

食料は「重要書類篠田隊」の木札を付けましたが、他部隊とのトラブルを考えてのことで、以心伝心と言うべきか、背中いっぱいの入れ墨の部下が荷物監視を引き受け、丸十日の航海中、オヤツを支給しながらの復員は、他に類を聞かぬ快挙でありました。

赤道直下の孤島に置き去られた小さな隊の語られざる裏面史は、公的記録から除かれた敗戦の悲劇でありますが、残留が体力回復に役だったことは嬉しいことでした。

輜重兵第十連隊
米倉（自動車）大隊の戦闘

兵庫県　高倍徳雄

昭和十九年十二月、私は輜重兵第十連隊第二大隊付主計として、部隊と共に台湾高雄港より比島に向かう輸送船上にあった。

前年六月、満州新京八一五部隊を卒業し、経理部見習士官として、原隊である北満州、佳木斯（ジャムス）の第十師団輜重兵第十連隊に帰った私は、そのまま同連隊勤務となり、糧秣係等の業務に従事、十二月には主計少尉に任官していたが、関東軍よりの南方転用が始まるとともに翌十九年七月、第十師団にも動員令が下り、あらたな編成で「鉄兵団」となって台湾に移駐、わずか三カ月後再び動員下令、比島へ向かうことになったのである。

なお、私は第一回目の動員のときから第二大隊付主